

日本中に日本一の 木工産地大川を宣伝したい

的場運送(株)

代表取締役社長 的場 茂さん



的場茂さんにお話を聞いた。的場さんは大川市では最も古参の運送会社、的場運送(株)の社長である。二代目。軍馬の世話をしていた初代は、終戦後、一頭の馬を使って大川で木材の運搬業を始めた。やがてそれが家具運送業に発展していった。的場さんは三十四年前、三十一歳の時、父から家業を引き継いだ。

そのとき強い責任感とプレッシャーを感じたそう。そして「強い会社を造る、繁栄する企業にする」ことを目標にした。ただし、規模の大きい会社にするつもりはなかったという。「石にたとえると小さいけれど、ダイヤのように輝ける企業にしたい」と考えた。

実際そうした企業に成長してきた。的場運送は不況下にもかかわらず、収益性の高い企業運営を続けているのだ。現在、デynos、パラマウント、ニッセン、マルイ、ヤマトコンビニエンス、三栄コーポレーションといった大手との直接取引もある。当初から



手形を使わない、借金0の経営スタイルだ。トラックもリースしない。すべて自社所有だ。今年も八台のトラックを購入した。

企業の活力はどこから来るのだろうか。的場さんは、会社を野球のチームに例える。「監督だけでは試合はできません。実際に戦うのは選手。指揮官、ピッチャー、キャッチャー、内野手、外野手が一丸になるとき、力を発揮で

きると思うのです。」

社長になった初めての年、その考え方を従業員の前で話した。嬉野での忘年会の席上だった。「会社は皆さんが築き上げるもの…。みんなで成長していきましょう。」と激励した。

チーム一丸の考え方は今でも変わっていない。「会社を作りあげてきたのは皆さん自身です。誇りを持ってほしい。私はただ指揮を執ってき

ただけ。本当に感謝している！」と機会あるごとに従業員に話をする。

自分の会社という考えから、従業員全員も毎朝、掃除に携わる。

指揮官として手本を示そうとした。そのため酒は飲めないと考えた。なぜだろうか？「夜間配送中、車が故障したり、事故に遭ったりしたときに、どこであつてもすぐに駆けつけられるようにです。運転手は私の自宅に公衆電話で連絡してくるのです。」

チームワークのため、ドライバー、倉庫担当、営業、事務、すべての従業員が企業経営に参加できるようにしている。風通しを良くして、部署毎の障壁をなくしている。月に四回ぐらいは全体で勉強会をする。みんな垣根を越え、どんな改善点があるのか、検討をする。こうして指揮官を中心に方向性を決めていくのだ。

営業スタッフが原価の九十九%で仕事を取ってきた場合、的場さんがそれをとがめることは決してしない。仕事0よ

りいいのである。チームワークで、出費を抑え収益を上げるように企業努力をする。

また陰口のない、働きやすい職場環境に気を配る。たとえば、ドライバーが事故を起こした場合、みんなの前でそのミス、その状況、反省点を発表する。それでみんながすつきりする。「円滑な人間関係を維持する助けになります。」

夢は何だろうか。それは、大川家具業界が一丸になって発展していくこと。

その考えは企業としてだけでなく、「ふるさと愛」からだという。

「今、家具業界が縮小している傾向にあります。このままではとんでもないことになるという危惧があります。大川はチームワークのいいところ。メーカー、資材、塗料、販売、物流、みんなが協力して、プラス思考で何をできるのか、考えていく必要があります。たとえば、吉野ヶ里、筑後川などの観光資源と大川を結びつけて、多くの人が大川に来ていただくシステム作



ヤマトコンビニエンスネットワークの窓口を行っている

り。そして、一堂に家具類を見ていただく施設が必要だと思っています。また、トラック組合としても、大川の宣伝に貢献したいと願っています。福岡県トラック協会大川分会傘下三十四社のすべての車、約六〇〇台に、色、デザイン、サイズを統一した、大川のロゴ、ポップなどをつけることもできる、と考えています。近場、遠方、日本中に、日本一の木工産地大川を宣伝したいですね。」